

“NEW GLASS 誌に新しい輝きを！”



兵庫県立大学

矢澤 哲夫

(Serial. No. 73~80 編集長)

まず最初に、100号、おめでとうございます。100号といえば、年4回の季刊発行で25年、25年と言えば、4半世紀であり、同種の雑誌類と比較しても、長期間の継続発刊という感があり、その間、本誌の刊行に携わってこられた関係各位に改めて敬意を表したい。私は、野上編集長の後を受けて、2004年No.2から2006年No.1までの計8号を担当した。ニューガラスフォーラムの大きな使命の一つは、産官学の出会いの場を提供することにあるかと思う。従って、その機関誌であるNEW GLASS誌も、その意を汲んだ内容であるべきで、それは今後も変わらない本誌のコンセプトであろうかと思う。

私が編集に携わっていた間の編集方針としては、縦糸として、環境・エネルギー、情報通信、バイオ関連という大きな出口分野を大略設定し、また、横糸の産業界との関連として、自動車産業やエレクトロニクス産業を取り上げた。また、ガラスそのものとしては、硝種別にシリカガラスなどを取り上げたかと思う。とにかく、NEW GLASS誌に目を通しておけば、日本のみならず、世界の研究開発動向が大略分かるような雑誌に、との思いで臨んだ。私の印象としては、これまで編集に携わってこられた各位の努力のかいあってか、そのような目的は一応達成されているのではないかと思う。

私の編集長時代の印象深い企画としてニューガラスフォーラム20周年座談会があった。学界から、牧島亮男先生、平尾一之先生、産業界から近藤敏和氏、伊藤節郎氏をお迎えし、私が司会進行を仰せつかる形で行った。当該座談会では、ニューガラスフォーラム設立以来の当該フォーラムを取り巻く環境の変遷や、ガラス業界全般の動き、産と学における研究開発のあり方や動向、人材育成等の多岐に亘る話題を幅広く取り上げての座談会であったかと思う。その中で、“非線形光電子材料の研究開発”、“ナノガラス”のような国家プロジェクトが産学における研究開発の動機づけとなるような側面があることが語られた。また、人材育成として、学生や若い研究者・技術者に向けてガラスの魅力的な情報を発信し続けていくことの重要性が語られたかと思う。こうしたことが功を奏してか、ガラスに対する最近の学生における人気は高いものがあると思う。

産と学が各々の本分である、開発研究、基礎研究の役割を果たす上での連携や、次代を

になう学生や若手研究者・技術者の育成に心がけられるような場を本誌が提供しつづけていくことが、今後とも変わらぬ本誌に寄せられる願いであろうかと思う。本誌が、150号、200号へ向けて更なる前進を続けられんことを心から願ってやまない。末尾ながら、ご一緒に編集に携わった、当時の編集委員の方々に改めて謝意を表したい。